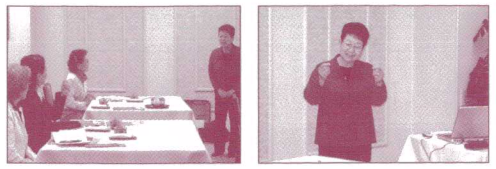
世界遺産 石見銀山遺跡とその文化的景観を訪ねて

—石見銀山を支えた女性たち—

平成20年(2008) 6月16日・17日
主　催：海外研修KYOのあけぼの会

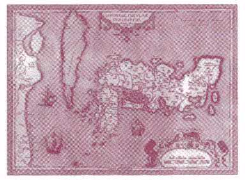
世界遺産とは二度と再現することが不可能で、人類共通の未来に伝えていくべき価値があり、民族や国境を越えて、国際的に協力して保護する必要がある文化財のことを言います。また同時に世界遺産条約に基づく世界遺産リストに記載されている物件を言い、登録数は851件、うち日本の世界遺産は14件で、法隆寺をはじめ姫路城や厳島神社、原爆ドームなどの文化遺産が11件、屋久島や白神山地、知床の自然遺産が3件となっています。

事前学習会



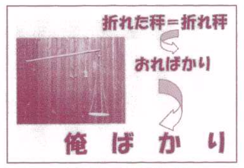
石見地方の地図

銀山の歴史と登録までの道のり

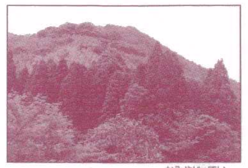


ポルトガルの宣教師テイセラの日本図

鉄鍋で銀をとる灰吹法

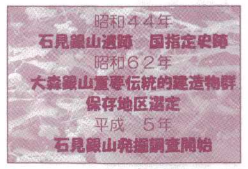


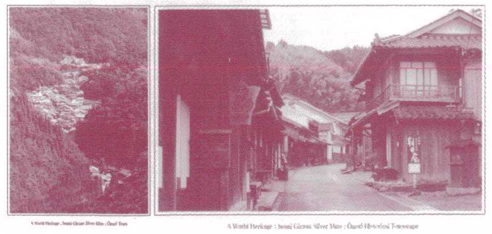
折れた秤＝俺ばかり



神屋寿禎(かみやじゅてい) 海から山を発見

登録までの道のり





大森の町並み

1日目／事前学習会

講師の和上豊子先生は元学校教師で、教育委員を経て退職後「石見銀山ガイドの会」を立ち上げられ、現在は会長として活躍されています。先生は地元育ちで、子供の頃から繰り返し聞かされた豊かな歴史や秘められた魅力を伝えたいと、自らも世界遺産登録に関わってこられ、登録にいたるまでのご苦労話を、スライドを通し、身振り手振りの歯切れのよい口調でお話しくださいました。

私たちは誰もが先生の魅力ある語り口に、「ああよかった」「もっと聞きたい」「すばらしいお方や」と時を惜しみました。本当にいい事前学習の場となりました。

1)複合遺産「石見銀山」の位置図

日本海に面する島根県大田市大森町のおおよその地図です。

銀山・大森地区を中心にして、海運で栄えた**鞆ヶ浦港と沖泊港**を結ぶ、440ヘクタールの広さがあります。この産業遺産の一部である、銀山地区と大森地区を見学しました。

2)石見銀山の歴史

①16世紀から17世紀に世界の銀の産出量の3分の1を日本が占めていました。そのほとんどが、この石見銀山から採掘されていたのです。マルコ・ポーロの「ジパングの宝の山」がこの日本地図の石見だったのです。

②なぜ、石見銀山が繁栄したのでしょうか。

一つ目に精錬用の燃料の薪が周囲の森林から得られたこと、二つ目は鉱山用具や資材となる鉄やマンガンなども石見の山々に産出したこと、三つ目はすべての作業が**ノミ**や**タガネ**を使った人力による手工業的生産が行われていたことの3点があげられます。

それに加え**「灰吹法(はいふきほう)」**という技術が中国から伝わり、開発されたことでした。炉の下にくぼみをこしらえて灰をつめ、その上に金銀と鉛の混合物をのせて加熱すると、鉛は溶け出して灰に吸収され、後に金銀の塊だけが残るという方法です。この方法でできたのが「灰吹銀」でした。

③さて、石見銀山はどうして発見されたのでしょうか。

1526年、安土桃山時代、博多の貿易商人**神屋寿禎**が、航海に出ようとした時、商売道具の秤が折れたので、縁起が悪いと嘆いていると、おかみさんが**「折れた秤」**は**「俺ばかり」**といって運がむいてきたのだと船を送り出したところ、ほどなく船上から光り輝く石見の山を発見したということです。その後、銀の争奪戦が長く続き、勝ち取った人によって、様様な歴史に塗り替えられてきたそうです。

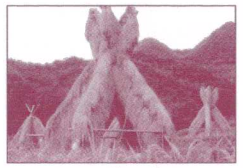
3)世界遺産登録までの道のり

すでに銀山の遺跡は「国指定史跡」であり、大森の町並みは「重要伝統的建造物群保存地区」に選定されています。

平成 5 年	発掘調査スタート
平成13年	暫定リスト登載
平成18年	ユネスコ世界遺産センターに**推薦書**提出
	イコモスの現地調査
	・物件が保護されているか
	・バッファゾーンといってゆったりとした環境の設定がされているか、
	・まわりに景観を損ねているものがないかなどのチェック
平成19年5月	イコモス**登録延期**という勧告
19年7月	**登録決定**

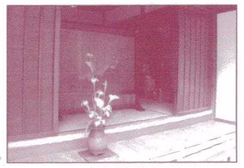
高いハードルを乗り越え、延期勧告の二ヵ月後の七月に一変し、世界遺産委員会の**最終日に登録決定**となりました。その認められた「普遍的価値」とは「16世紀からすでに環境に配慮し、自然と共生した鉱山経営が行われてきたこと」「鉱山や町並・街道・港・生産・輸送・支配・信仰などがセットで残っている」ことなどでした。

保全活動



ヨズクハデ

女性たちの活動

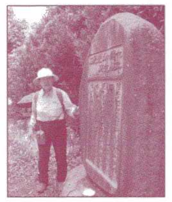


商家熊谷家

竹筒に花を生ける

いよいよ石見銀山へ

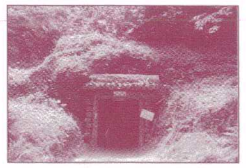
銀山への道

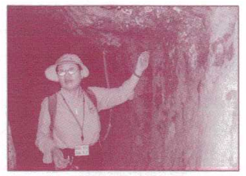


仙ノ山

大森小学校の子供たち

龍源寺間歩





4)保全活動と女性の活動

①登録されて1年、**保全**にむけての新たな活動

人と自然とのつながりによる地域活性のため「石見銀山行動計画」の立ち上げ

伝統行事「**ヨズクハデ**」(石見地方独特の稲木かけ)の作業体験

「銀の道ウオーク」などの参加型の事業

②地域では、行事、見学会、現地指導、住民説明会など毎年、年間150回くらい開催。

③現在、**地域を守る活動**をされている主な女性たち

「重要文化財・熊谷家の家のおんなたち」は修理や修繕など、文化財住宅の新しい運営

「いも娘(むす)」さんは竹筒をつくって軒先に吊るして花を生け、町並みを美しくする取り組み

2日目／いよいよ石見銀山ど真ん中へ

①まず、一般車両の乗り入れ禁止の**パーク　アンド　ライド方式**を取り入れているので、大森地区の代官所跡で路線バスに乗り換えました。それは環境に配慮した方法で感心しました。

②私たちは、見学の要である龍源寺間歩へ向かいました。

③早速、昨日の続きの名調子で、さりげなく、それでいて凛としたお話し振りに私たちの目は輝きます。

④銀山間歩のバス停で下車した私たちは、なだらかな遊歩道をゆったりと歩きました。**銀山への道**を少しご紹介いたしましょう。

⑤後になったり先になったり皆さんキョロキョロされて興味津津でした。皆さんが見上げている山が、銀の山すなわち「**仙ノ山**」です。この山の発見にまつわるお話に聞き入っていましたところ、偶然にも先生方に引率された**大森小学校の子供たち**に出会いました。

⑥校外学習とのことで、地域の文化財の保全や、歴史的遺産の見学など、理解を深めるための学習の場に遭遇することができました。その子供たちの明るい笑顔に、これからの石見銀山を守り続けていく未来をみたように思いました。生徒さんと一緒に「記念写真、はいポーズ」和やかな一コマとなりました。

⑦さて、遊歩道沿いの山の斜面には、人一人が入れるくらいの坑道をいくつか見ることができました。光の当たらない湿っぽさが何かいにしえへの思いが伝わってくる思いがしました。

⑧やっと**龍源寺間歩**に到着です。

⑨龍源寺間歩についての説明をお聞きしました。石見銀山では銀を掘り出す坑道を「間歩(まぶ)」と呼びます。大小様々なものがあって、600以上も確認されています。

⑩間歩の入り口に立った時、ひんやりとした風を頬に感じて一種の感動を覚えました。今から480年ほど前に銀山として栄え、世界でも質の高い銀を掘り出した場所です。そこに私たちが立っている、そのことが遺産だと思います。

⑪坑道は人が歩ける高さと幅がありますが、左右の壁面から掘り進んだ穴は非常に狭く、その数20余り、よくこんな場所で、採掘したものだと驚きも束の間、**ふんどし、むしろ**といういでたちや、木綿半纏を着ている**絵図**には、水抜き用の穴や、たて坑で連結をした酸欠対策の穴や、運搬を目的とした坑道が描かれていました。

⑫その坑道にはノミの跡を繊細に見ることができました。

⑬大森地区は自然に囲まれた緑豊かな所です。銀山が栄えていたときには広大な柵で囲まれ、銀山柵内(さくのうち)と今でも呼ばれています。その山道の両側には家が立ち並び、山の頂上まで軒伝いに歩けたそうです。当時20万人の人口で、鉱夫の平均寿命が30歳であったことから苛酷な生活がうかがえます。生活保障として3歳以下の子供には日に3合の米が与えられ、病人には塩が配られたということですが、女、子供を問わず、家族はともに働いて鉱夫を助けていたようです。今はその面影もなく、美しい緑の里山の道端に、可憐な花が訪れる人を慰めてくれていました。